

㊦ たくさん採れた、たくさんできた

昭和 33 年に着任した神末小学校の運動場のまわりには、お茶の木が植えられていました。何年か前に植えられたというこの木は年々大きくなり、運動場を取り巻く生け垣になっていました。カイツカイブキやウバメガシといった生け垣はどこにでも見られますが、お茶の木が生け垣だというのはちょっと珍しいと思いました。

5 月、「夏も近づく八十八夜 野にも山にも 若葉がしげる」という歌が教室から聞こえてくるころ、5・6 年生の子どもたちによる茶摘みが行われました。「茜たすきに菅の笠」ではなく、体操服での作業でしたが、初夏の風物詩でした。採れた茶の葉はリヤカーに積み込み、村内にある茶工場に運んで加工してもらうのです。

数日後、たくさんのお茶が届けられました。このお茶が 1 年間の昼食のときのお茶になるのです。とはいっても少し足りません。その分は購入されていました。しかし、それも私が勤務した 3 年目くらいになると十分な量になりました。それだけ、茶の木が大きくなって生産量が伸びたのです。昼御飯には自分たちの手で摘んだお茶を飲む、ちょっとぜいたくな体験でした。

この学校での自給自足はお茶だけではありません。お味噌もそうでした。大豆から味噌を作るのです。これは、子どもたちの仕事ではなくお母さんたちの仕事でした。用務員室の大きななべで煮た大豆に麴と食塩を加えて大きな団子のようにします。この味噌玉と呼ばれる団子は、冬の間、子どもたちの弁当を温めていた保温箱に入れられます。ここで味噌玉が醗酵するのです。

冬になると、この手作りの味噌で作られた味噌汁が、子どもたちの昼食に出てきます。炊事は、当番のお母さんでした。手作りの味噌に

育友会費で購入される豆腐が入った温かい味噌汁は子どもたちの冬の楽しみでした。当番のお母さんは家の畑で採れた野菜を手に学校にやって来られます。ですから、この味噌汁に入っている野菜はいろいろでした。

「今日はニンジン嫌いの〇〇君のお母さんだ。きっとニンジンがいっぱいだぞ。ぼくは好きだからいいけど」

「今日は〇〇さんのお母さんだ。豚肉入りだ。楽しみだなあ」
こんな日もありました。

今だったらどうでしょう。

「みんないっしょでないと問題が起こるのではありませんか」

「勝手に豪勢な具は入れないようにしましょう」

「野菜しか入れられないお家の子どもが悲しく思いませんか」

「金持ちだからといって豚汁にするなんて、なにか自分を見せびらかしているように思います」

そんな論議があるかもしれません。

それぞれ違いがあってもいいんだ。あの人のお家だったらそれでもいいじゃないか。そんな大らかな時代でした。

この学校に勤務して3年目、学校給食が始まりました。専門の調理師さんの手になる給食です。パンは遠い町から運ばれてきたもの、ミルクは脱脂粉乳を湯に溶かしたものでした。なかなか溶けきれずに団子のように固まったり、変なおいがしたりしてあまり歓迎されなかったあの牛乳です。戦後のタンパク質やカルシウム不足から抜け出すためのすばらしいプレゼントであったことは確かなのですが、私にとっては、カルシウムの固まりであるような出し雑魚の骨がざらつく熱々の味噌汁のほうが、より身につく栄養分が詰まっているように思われました。